

エドモンド・バークの文壇登場

岸 本 広 司

Edmund Burke's Entrance into the Literary World

Hiroshi Kishimoto

Summary

Edmund Burke went to London to study law in 1750. He applied himself assiduously enough at first to jurisprudence, but his heart was rather in literature and his ambition was to make a career in the literary world. Six years later, his literary ambition was realized. He was able to become a prominent writer. The aim of this paper is to clarify the background of Burke's entrance into the literary world through a biographical examination.

Received April 30, 1986

I は じ め に

フランス革命と共に語られ近代保守主義の祖と言われているエドモンド・バーク（Edmund Burke, 1729–97）が、政治家や政治思想家として世に出る前にまず文人であったということは意外と知られていない。彼は、ヴァーニー卿の所有する選挙区ウェンドーヴァーから下院議員に選出されるまでの青年時代に、後年の政治的著作とは多分に性格を異にする幾冊かの書を著わしている。バークは文芸批評家、美学者、歴史家、ジャーナリストとして出立したのであり、初期の彼は、およそ非政治的な領域で仕事をしていたのであった。

本稿は、ダブリンのトリニティ・カレッジを卒業してロンドンに出る21歳から政界に入る36歳までの約15年間のバークを取り上げて、この間にバークがどのような作品を著わし、いかなる背景の下で文壇に登場していったかを伝記的に考察したものである。本稿は、筆者のこれまでの初期バーク研究の「空白部分」を埋めようとするものであり、初期著作の政治思想的意義についての論究は別稿に譲られる。⁽¹⁾

II ロンドン上京と「空白の時期」

文字通り思想の形成期となったバークのカレッジ生活も、1748年2月28日の学士号取得と共に一応終結した。しかしその後もバークは大学にとどまって、社会浄化のために文芸への関心を持ち続け、『改革者』を4月21日の13号まで刊行して文芸運動を展開する一方、自らの文芸理論を一層精緻なものとするために、文芸趣味についての研究を、とりわけ崇高と美についての研究をより本格的に行なっ

ていった。この時期の研究が、1757年の『崇高と美』に結実していくことは言うまでもない。バークはカレッジを卒業しても、文芸の世界に変わることなく強い興味を持ち続けていたのである。⁽²⁾

さてバークは、1750年にはダブリンを去って⁽³⁾ロンドンのミドル・テンプル（Middle Temple）に入学する。バークの名前はすでに47年4月23日に登録されているが、彼が実際に入学したのは50年5月2日、21歳の時であった。入学の際にバークの保証人となった2名のうちの一人は、ロンドン在住の弁護士ジョン・バーク（John Burke）であった。彼は、同じ年の5月26日にミドル・テンプルに入学したウィリアム・バーク（William Burke）の父親である。バークとウィリアムは互いに「従兄」と呼び合って、非常に緊密な関係を生涯にわたって保ち続けた。しかし兩人が、果たして血縁関係にあったかどうかは不明である。⁽⁴⁾

バークより1歳年長のこのウィリアムは、ウェストミンスター・スクールとオックスフォード大学のクライスト・チャーチを卒業後、法律家になるべくミドル・テンプルに入学し、いわゆる「バーク一家」の一員としてバークと永い間共同生活を営んだ。そしてやがて法律家となり、1766年から74年にかけてイギリスの下院議員にも選出された。しかし彼は投機好みの野心家で、そのため世間からさまざまに非難・攻撃された悪名高き人物であった。とりわけ東インド株式相場で失敗をした後のウィリアムは、政治的・社会的に完全に信用を落とし、バークにも、物心両面にわたって多大の損失を与えたのであった。けれどもウィリアムは、その社交的性格の故に交友関係広く、バークが政界有力者の知遇を得て、やがて政治家として公的世界に出ることができたのも、その直接的契機を作ったのはこのウィリアムであった。否そればかりか、バークをば、「イギリスを破滅から救出することのできる唯一の人物⁽⁵⁾」と高く評価していたウィリアムは、1765年の選挙の際に、自分の選挙区の権利をバークに譲ったのみならず、1780年の選挙の時にもバークのために懸命に奔走して、彼に犠牲的なまでに献身したのであった。したがってバークにとってウィリアムは、たとえ世間から指弾されている人物であろうとも、まさに友人以上の存在で、それ故ウィリアムに対しては、常に感謝の念を持ち続けたのであった。例えば1771年の書簡には、次のような表現を見ることができる。

「私は」—— とバークは述べている —— 「自分の人生を振り返りますと、ウィリアムから直接的・間接的に多大の恩恵に与ったことを思い出します。ロッキンガム侯と知り合いになれましたのは彼の助力があったからですし、下院議員になれましたのも彼のおかげです。更に私は、貴方と親しくさせていただくようになって以来、貴方から賜りましたすべての恵みも彼のおかげとしなければなりません。私が初めて立候補した時、彼は私を励まして自分の権利を譲ってくれました。これこそ真の友情だと思います。⁽⁶⁾」

ところで、バークがミドル・テンプルに入学したのは弁護士である父親の強い希望に沿ったものであり、法律を学んで法曹界に入るのがその理由であった。しかし文芸に並々ならぬ関心を抱いていたバークは、ロンドン上京後も法学の修業に身が入らず、卒業期には父親との決裂を承知の上で、自分は法律家に適していないとして法学の勉強を放棄した。もっとも、バークが法学の存在意義を認めなかったわけでは決してなく、法の中に祖先の生ける経験知を看取して、それに尊敬の念を抱いていることはカレッジ時代のクラブ発言の中に見出される通りである。⁽⁷⁾ また法学を「秩序ある国家の主要

な学問⁽⁸⁾」あるいは「人間の学問のうちでも第一の、そして最も高貴なものの一つである⁽⁹⁾」と看做していることは、数年後の『イギリス史略』や1774年の『アメリカへの課税に関する演説』(*Speech on American Taxation*)の中に参看し得る通りである。したがって、バークも法学の重要性を充分承知しており、事実、入学1年あまりのバークは法学修業を真剣に考え、それなりの勉学を積み重ねていたようである。そのことは、1751年8月の友人宛書簡からも窺い知ることができよう。「私は、現在の勉学が首尾良くいけば良いと願っています。少なくとも私は二流の詩人には我慢できませんが、二流の法律家は存在意義があると考えて自分を慰めています。私はできるだけ多くの本を読んでいます。⁽¹⁰⁾」

しかしながら、バークが父親の期待通りに法律家になることはついぞなく、逆に父リチャードの嫌悪する文芸の世界に入ってしまったのであった。こうしたバークの態度が、齢と共に極度に神経質になっていたリチャードを激昂させたことは想像に難くない。実際老バークは、「父親からの逃亡息子⁽¹¹⁾」に対する仕置として、年額100ポンドの送金を停止した⁽¹²⁾。これはバークにとって致命的であった。この一件によってバーク親子の溝がより一層深くなり、両者の不和が決定的なものになったことは確かである⁽¹³⁾。しかし仕送りの停止が逆にバークを発奮させて、文筆家バークの名を世に出させる契機となったこともまた事実であった。というのも仕送りの跡絶えたバークは、文字通り「食べる」ために優れた作品を発表しなければならなくなったからである。そしてそうした過程の中でバークは、自らの思想を自覚化し具体化し、またそれを深化させていったのであった。1756年5月の『自然社会の擁護』が、こうした状況の中で発表された佳作であることは後述する通りである。この作品によってバークは、父親との義絶を引き起こしながらも、文学界に或る程度知られるようになり、希望通り新進の文人として世に出ることができたのであった。

さてこのようにして、ウィリアムと共同生活を営んでいたロンドン在住期のバークは、次第に法学の修業を放棄して文芸の世界に足を踏み入れていくが、しかし実のところ、この時期のバークの行動を正確に追跡することはほとんど不可能に近い。事実我々は、これまでのバーク伝を繙いても、そのことごとくが1750年のミドル・テンプル入学から56年の『自然社会の擁護』刊行までの6年間を、闇に閉ざされた不可解な時期としているのに気付くのである。例えばビクトリア期の優れた伝記作家であるJ・モーリー(John Morley)は、この数年間を「ほとんど全くの暗闇に覆われた⁽¹⁴⁾」謎の時期とし、D・ヴェクター(Dixon Wecter)やT・W・コーブランド(Thomas W. Copeland)も、「バーク伝における空白の時期⁽¹⁵⁾」、あるいは「生涯で最も不明瞭な時期⁽¹⁶⁾」としていわば「青年時代の幕合い」としているのである。なるほどこの間の書簡が今日7通残されており、それらから、法学修業をめぐるバークの卒直な思いや⁽¹⁷⁾、「従兄」ウィリアムと南西イングランドを旅行して楽しんでいる様子⁽¹⁸⁾を垣間見ることは可能である。しかしそれら書簡は、この時期のバークをあくまでも断片的に伝えるばかりで、決してその全体を知らしめるものではないのである。したがってこうした資料的不足の故に、従来からさまざまな伝説が生み出されてきた。例えばカトリック教への改宗、アメリカやフランスへの渡航、アイルランド出身の女優P・ウォフントン(Peg Woffington)との親密な交際、アダム・スミスの後任としてグラスゴー大学の道德哲学の椅子をヒュームと争ったという説

等々がそれである⁽¹⁹⁾。バークがアメリカ行きを希望していたことは事実としても⁽²⁰⁾、以上の説を裏づける信頼すべき資料はなく、それ故1750年から6年あまりのバークは、今なお曖昧なままに残されているのである。

しかしながら我々は、この時期のバークの行動を追体験し得ないとしても、彼の思想の軌跡を辿ることは決して不可能ではない。否、当時のバークが何を考え、何を基本的理念としていたかをかなり明瞭に知ることができるのである。というのも当時のバークは何篇かの短い覚え書きを残しているが、現在の我々は、それら覚え書きを編纂して、アーネスト・バーカー (Ernest Barker) の序文を付して1957年に公刊された『エドモンド・バークのノート・ブック』(*A Note-Book of Edmund Burke*)を持っているからである。そしてそれによって、21歳から27歳までの青年バークの観念の発展を、前後の思想と関連させながら捉えることができるからである。もっとも、本書に収められたノートのすべてがバークのものであるとは限らず、全24篇の中で18篇がバークのもの、4篇は前記ウィリアム・バークのもの、残りの2篇は兩人いずれが書いたのか不明とされている⁽²¹⁾。しかしいずれにせよ、編者H・V・F・サマセット (H. V. F. Somerset) の厳密な考証によれば、そのほとんどがバークの覚え書きであることは間違いなく、したがって我々は、この『ノート・ブック』を彼の「空白の時期」を埋めるものとして大いに活用することができるのである。そこで別稿で、従来あまり重きを置かれてこなかったこの断片的ノート類を検討することによって、とりわけ「理性と感情」の問題を主たるテーマとすることによって、『改革者』から『自然社会の擁護』、及び『崇高と美』に至るまでのバークの思想を追跡あるいは再構成しようと思う。そうすることによって我々は、若きバークにおける思想形成をより詳細に捉えることができるであろう。

Ⅲ 初期著作の執筆とその背景

1750年のロンドン上京から6年あまり続いた「空白の時期」も、1756年5月18日の『自然社会の擁護』の刊行と共に終った。我々は、再びバークの経歴を辿っていくことができる。そこで、『刑罰法論』に至るまでの初期の諸著作が、一体どのような状況下で執筆されたかを伝記的考察を交えながら見ていこう。まず『自然社会の擁護』から始めるならば、本書は1シリング6ペンスの値段⁽²²⁾で、ロバート・ドズリー (Robert Dodsley) の経営する著名なドズリー書店⁽²³⁾から匿名で出版された。本書には、『自然社会の擁護—あらゆる種類の人為社会が人類にもたらす悲惨と害悪についての一見解。亡き貴族である著者から***卿への手紙』(*A Vindication of Natural Society: or, A View of the Miseries and Evils arising to Mankind from every Species of Artificial Society. In a Letter to Lord ***, by a late Noble Writer.*) という長い書名が付いているばかりで、バークを窺わせるものは何一つとしてなかった。そのため本書が世に出た当初、作者がバークであるとはおよそ考えられず、むしろ人々は、この本の著者たる「亡き貴族」とは、5年前に死去したトーリー党の政論家ボーリングブルック (Henry Saint John Bolingbroke) であると考えた。つまり人々はこの作品を、1754年3月の『ボーリングブルック著作集』刊行以後に発見されたボーリングブルックの未発表の論稿であると考えたのである。そして多くの人々がそのことを信じて疑わなかった。例え

ば当時の著名な文人であるチェスターフィールド（Philip Dormer Stanhope Chesterfield）やウォーバートン（William Warburton）でさえも、これがボーリングブルックの真作であると固く信じていたのである。⁽²⁴⁾ しかも彼らがそのように信じてても何ら不思議ではないほどに、本書の論理や文体はボーリングブルックのそれらに酷似していたのであった。

本書のスタイルがボーリングブルックのそれに酷似しているという事実は、しかし決して偶然なことではなかった。というのも本書の意図は、バーク自身が翌57年12月16日の再版序文で明らかにしたように、ボーリングブルックの思想や文体を意図的に模倣し、模倣することによって、逆に彼の思想の危険性を暴露し、ひいてはそれを批判するところにあったからである。なるほど、こうしたバークの真意が世間の人々に理解されたとは言い難い。むしろ逆の結果をもたらしたというのが実情であった。しかしながら、ボーリングブルックを模倣して人々を欺くというバークの方法そのものは完全に成功し、本書は文人たちの注目を集めるところとなったのである。そしてバークは、まさにこの『自然社会の擁護』によって、文壇に颯爽とデビューすることができたのであった。

第一作目で成功を収めたバークは、1757年3月12日に、当時バースで開業していたアイルランド出身の医師クリストファー・ニュージェント（Christopher Nugent）の娘ジェーン（Jane Nugent）と結婚した。義父クリストファーは、医者としても著名であったが、ジョンソン博士（Samuel Johnson）の「文学クラブ」の創立会員であったところから、むしろ文人としてイギリス文学史にその名をとどめている人物である。バークとジェーンのロマンスは、バークが1750年の秋に病氣療養を兼ねて南西イングランドを旅行した際、このニュージェント博士の診察を受けた時か、その後も人生上の相談相手として、⁽²⁵⁾ ニュージェント家を訪れるようになった時に芽生えたと言われている。⁽²⁶⁾ バークがジェーンをどれほど理想の女性と崇めていたかは、バーク自身のジェーン評からも明らかであろう。彼はジェーンの人となり、美しい筆致でこう述べている。

「彼女は端麗である。しかしその美は、顔立ちや姿といった外的な容姿に基づいたものではない。彼女は素晴らしい容姿をしている。しかし彼女に会った人はそのことを賛美的とはしない。むしろ人々が称えるのは、彼女の気性の優しさや博愛心や清浄さや感情のこまやかさであり、それらが彼女の美を作り出している。

.....

彼女は、堅固な意志を排除することなき繊細さを持っている。

彼女は、弱さを意味することなき柔和さを持っている。

彼女には女らしさがある、それは下品なけばけばしさよりも、印象深い地味な服装に示されている。彼女は常に小ざれいであるが、それは堅苦しさでも気どりでない。

彼女の落ち着きは思慮深さを示している。

彼女の微笑みは言葉に表わせない。

彼女の声は低く、静かな音楽のようである。……

彼女の姿を描くことは、彼女の心を描くことである。前者は後者の写しである。

彼女の知性は……選択の良さに発揮される。

彼女は、目立ったことを行ったり語ったりするためよりも、言うてはならぬことや行ってはならぬことを避けるために、その知性を行行使する。

彼女は、正なるものと不正なるものを推論よりは賢察によって区別する。

.....

彼女は、人々から真に尊敬されるようなさまざまな美德を持っている。彼女は、人々から欠点でさえも愛されるような魅力的なしとやかさを持っている。

一体誰がこうした女性と知り合いになれようか。一体誰がこうした女性を愛さずにいられようか。⁽²⁷⁾」

バークの描くこうしたジェーン像は、あまりにも美的になり過ぎているかもしれない。しかしジェーンが温和で賢明な女性であったことはウィリアム・バークが承認し、⁽²⁸⁾ 下院議員フィリップ・フランシス (Philip Francis) や博愛主義者ハンナ・モア (Hannah More) や女流文学者ファニー・バーニー (Fanny Burney) たちも一致して認めるところである。⁽²⁹⁾ バークは、ジェーンの持つ女性としての美的徳性に何よりも強く魅了されていたのであった。そしてバークの友人リチャード・シャクルトン (Richard Shackleton) が、『ロンドン・イーヴニング・ポスト』 (*London Evening Post*) で述べているように、「バーク氏は彼女の宗教や財産目当てではなく、青春の愛情に基づいた自然的な衝動によって、ローマ・カトリックの信仰篤い、この上品で育ちの良い女性と結婚するに至った⁽³⁰⁾」のであった。

バークの家庭生活は幸せなものであった。もっとも、その生活は最初から二人だけのものではなかった。「従兄」ウィリアム、及びバークの実弟リチャード (Richard Burke)、そしてジェーンの弟で後にロンドンの税関調査官になるジョン・ニュージェント (John Nugent⁽³¹⁾) たちとの共同生活であった。ウィリアムと同じく生涯独身を通し、「バーク一家」の重要な構成員となった弟リチャードは、依頼心強く、飲酒と賭け事に溺れ易い問題多き人物であった。一晚のうちに、14,970ポンドもの大金をすってしまったという話が残っている。⁽³²⁾ そのため射幸心の強いリチャードやウィリアムのいる「バーク一家」は、しばしば「アイルランドの冒険者」 (Irish Adventurers⁽³³⁾) と蔑称されたが、しかしバークにとって彼らとの生活は、経済的には別としても、少なくとも精神的には十分に満ち足りたものであった。この時期のバークが、家庭の意義をどのように解し、また自らの思想にどのように位置づけていたかはわからない。しかし後のバークが、家族愛を公的愛情に至る「長い連鎖の最初の輪⁽³⁴⁾」と看做し、あるいは家庭道徳を「自然的な道徳の要素の中でも第一のもの⁽³⁵⁾」として、家庭それ自体を、極めて倫理的に把捉していることは周知の通りである。バークのこうした家庭観は、あるいは自らの幸福な生活体験に根ざし、そこから生み出されたものであったのかもしれない。そして仮にそうであるならば、我々には、バークにおける理念 (理想) の導出の仕方が、理想と現実の相克に悩み続けたルソーと較べて、両者の思想的類似性にも拘わらず、多分に異なっているように思われるのである。

さてバークは、結婚約1ヶ月後の4月21日に『崇高と美』を刊行している。『崇高と美についての我々の観念の起源の哲学的研究』 (*A Philosophical Inquiry into the Origin of Our Ideas of*

the Sublime and Beautiful) という書名を持つこの美学書は、先の『自然社会の擁護』と同様にドズリー書店から出版された。発行部数500、1部3シリングで販売されたが、公刊に先立って、バークは版元より稿料20ギニーを受領している。そしてもし第3版まで出るようなことになれば、その時更に10ギニー支払われるという約束がドズリーと交されていた⁽³⁶⁾ 古典主義美学を批判して、新たな美学理論を打ち立てんとした青年バークの野心的なこの作品は、その斬新さの故に次々と版を重ね、文壇に高い評価をもって受け入れられた。例えば、アーサー・マーフィー (Arthur Murphy) とゴールドスミス (Oliver Goldsmith) は、本書公刊後直ちに『リテラリー・マガジン』(*Literary Magazine*) と『マンスリー・レビュー』(*Monthly Review*) 誌にそれぞれ好意的な書評を寄稿した。⁽³⁷⁾ またヒュームはアダム・スミス宛書簡の中で、「最近バークは崇高についての非常に見事な論文を書いた⁽³⁸⁾」と語り、サミュエル・ジョンソンも、「バークの『崇高と美』には真の文芸批評の模範がある⁽³⁹⁾」と述べて、若きバークの書を絶賛した。

『崇高と美』が注目され評価されたのは、しかしながら、単にイギリス国内においてだけではない。フランスにあってもディドロ (Denis Diderot) の関心を引き起こし、⁽⁴⁰⁾ 1765年には、デフランソワ (Louis-Antoine Desfrancois) の手でフランス語に翻訳されている。そしてドイツでは、イギリスやフランス以上に高い評価を勝ち得、何人かの思想家たちに非常に大きな影響を及ぼした。例えば、M・メンデルスゾーン (Moses Mendelssohn) は1758年に本書を要約して批評し、G・E・レッシング (Gotthold Ephraim Lessing) は、同年1月に早くもその翻訳に着手している。更にJ・G・ヘルダー (Johann Gottfried Herder) もその翻訳を考えていたと伝えられているが、レッシング訳もヘルダー訳も、結局のところ完成しなかった。⁽⁴¹⁾ しかし、レッシングの『ラオコーン』(*Laocoön*, 1766) がバークの影響を強く受けていることはしばしば指摘される通りである。⁽⁴²⁾ そしてカントの『美と崇高との感情性に関する観察』(*Beobachtungen über des Gefühl des Schönen und Erhabenen*, 1766) と『判断力批判』(*Kritik der Urteilskraft*, 1790) が、バークの影響下にあることもしばしば言われる通りである。⁽⁴³⁾ バークの名前は、この『崇高と美』の公刊によって、イギリスのみならずフランスやドイツの知識人たちにも広く知れわたるようになったのであった。その意味からして『崇高と美』は、文字通りバークの出世作であったのである。

『崇高と美』が公刊された同じ年月に、正確に言えば1757年4月1日に、ドズリーより浩瀚な二巻本、『アメリカにおけるヨーロッパ人の植民地についての説明』(*An Account of the European Settlements in America*) が出版された。本書は、新大陸の発見以降、スペイン、ポルトガル、フランス、オランダ、イギリスの各列強が、南北アメリカをどのように植民してきたかを歴史的に辿り、またアメリカ原住民の生活様式や社会慣習を説明することによって、18世紀中葉のアメリカの現状を論じたものである。時あたかも英仏の植民地抗争として有名な七年戦争が勃発し、イギリスでは、アメリカにおける抗争の成り行きが注視され、アメリカ新大陸に関する新しい情報や正確な知識が広く求められていた。本書の序文にも、「アメリカ事情は最近世間から非常に注目されている⁽⁴⁴⁾」と記されている。そのため本書の出版は完全に時宜に適い、先の『崇高と美』と同様に多くの版を重ねたのであった。バークは版元から、50ギニーを受け取ったという記録が残っている。⁽⁴⁵⁾

ところで、『植民地の説明』が、バーク一人によって著わされたものではないということに注意を払っておく必要があろう。すなわち、バークがJ・ボズウェル（James Boswell）に「私はそれを書かなかった。友人がそれを著わしたということを否定しない⁽⁴⁶⁾」と述べているように、本書は、実は「従兄」ウィリアムの作品なのである。そのため『植民地の説明』は、これまでバーク全集に組み入れられることもなかった。しかし先の言葉に続けてバークが、「私はそれを校閲した。それ故そこに私の文章が全くないとは言わない」と語っているところからも推断し得る如く、本書はウィリアムの書いた草稿に、バークが加筆更訂して成り立ったものであり、したがって本書は、W・B・トッド（William B. Todd）の表現を用いて言うならば、バークとウィリアムの「合作⁽⁴⁷⁾」と看做されるべき作品なのである。我々は、別稿において、バークの思想形成に及ぼした本書の意義について触れるであろう。そこには、彼の政治思想を考察する上に無視し得ぬものが含まれているのである。

『植民地の説明』執筆に参加して、歴史的なものの見方に興味を抱いたバークは、今度は単独で純然たる歴史書を著わすことになった。すなわちバークは、57年2月25日に、ドズリーと翌58年12月25日までにイギリス史の執筆を完成させることを約束し、その出版契約を交したのである。そしてその際バークは、第一次の契約金として300ポンドを受領して、本格的な歴史研究とその叙述に乗り出したのであった。⁽⁴⁸⁾しかしイギリス史執筆は予定より大幅に遅れ、当初印刷に付されたのは僅か48ページのみであった。シーザー侵攻から13世紀までの史述が、『イギリス史略』（*An Essay towards an Abridgment of the English History*）という書名の下で今日見られるような姿で世に出たのは、バークの死後実に15年経った1812年のことである。

ところで、『イギリス史略』はジョン王治世のマグナ・カルタの叙述をもって擱筆されている。しかしバークが何故にマグナ・カルタで筆を置いたかについては彼自身何の説明もしておらず、その理由は実証研究の進んでいる今日にあっても今なお不明である。なるほど、このことに関しては従来からさまざまな憶測がなされてきた。とりわけ一般に信じられてきたのが、ヒュームの『イギリス史』（*History of England*, 1754-62）との関連である。つまり、本書執筆中にヒュームが『イギリス史』の叙述を企てていることを知ったバークが、そしてヒュームを超える歴史書を著わすことはもはや不可能であると悟ったバークが、マグナ・カルタ以降の執筆意欲を完全に喪失してしまったと言うのである。⁽⁴⁹⁾バーク研究史上、まことしやかに語られ定説とさえなってきたこの説も、しかし今や完全に論駁されている。けだしバークもドズリーも、ヒュームが『イギリス史』執筆に取りかかっていることをすでに聞き知っていたからである。事実、前期スチュアート朝を扱った第一巻は1754年に、後期スチュアート朝を叙述した第二巻は、バークが歴史研究に乗り出す前年の1756年に刊行されている。したがって、バークがヒュームの『イギリス史』の存在を知った上で歴史研究に入ったことは疑いなく、むしろバークが1760年まで確実に書き続けていたことは、或る印刷業者のドズリー宛書簡が示す通りである。⁽⁵⁰⁾更にまた、「貴方が勉学仲間として私を採用して下さった時以来、私が自分の小さい著書（the little work）を一種の年貢（rent charge）のように気にしていることを貴方は御存知のはずです⁽⁵¹⁾」という、1763年の有名なハミルトン（William Gerard Hamilton）宛書簡の中で語られている「小さい著書」が、もし『イギリス史略』を指したものであるとするならば、バークは実に

政治家として世に出るための準備期間中も、ドズリーとの約束をあたかも「年貢」であるかのように気にかけて、その完成に意を用いていたことになり⁽⁵²⁾、その意味からしても『イギリス史略』の中断は、決してヒュームの『イギリス史』がなさしめたものではなかったということになるのである。

近年、これとは別の理由が研究者の間で語られるようになっていく。例えば、1758年4月にドズリーと『年鑑』編集の契約を交し、その仕事のために執筆時間が削られてしまったこと、更に61年には、ハミルトンの秘書としてアイルランドのダブリンへ渡ったこと、そしてそのためにも執筆時間がなくなってしまったこと、そして64年には、出版責任者たるロバート・ドズリーが死去したこと等々がそれである⁽⁵³⁾。こうした事情の故に、バークは途中で筆を置かざるを得なくなったというのである。一面真実性を含んでいるように思われるこうした説も、しかしながら、あまり説得性を持ったものとは言い難い。なぜならば、編集業務や秘書の仕事で多忙を極めていた1761年に、バークは『刑罰法論』を著わしているからである。したがって、バークが何故に途中で擱筆したかは今もって知ることができず、我々としても隔靴搔痒の感をぬぐい得ない。新たな資料の発見を期待する所以である。

さて、『イギリス史略』の執筆によって歴史家として才能を示したバークは、その並外れた能力を、今度はジャーナリズムの世界で発揮することになった。すなわち彼は、50年4月24日に、年額100ポンドの報酬でその年の「歴史、政治、文学」上の出来事を「著述し、抄録し、編集する」という契約をドズリーと交したのである⁽⁵⁴⁾。今日まで継続している有力雑誌『年鑑』(*Annual Register, or View of the History, Politics, and Literature*)の仕事がそれである。創刊号たる1758年版は、翌5月15日に出版された。その後大抵5月に刊行されたこの『年鑑』は、八つ折版二段組み活字で、平均約500ページという大部なものであった。ところで、バークがこの仕事に一体いつまで携わっていたかは実ははっきりしない。というのも、本雑誌の編集者名は公表されず、バーク自身も、『年鑑』との関係をただの一度も語らなかったからである。それは、恐らく雑誌の執筆や編集の仕事が当時一般に低く見られていたからであろう⁽⁵⁵⁾。したがって、バークが『年鑑』に何年まで関わっていたかを確言し得ないが、しかし最近の厳密な考証によれば、少なくとも1766年まで単独でこの仕事に携わっていたのは間違いないとされている。そしてその後も何人かの助力を得て、死の数年前まで編集を行ない、あるいはたとえ積極的に関与せずとも、毎年書評を寄せたり、編集のアドバイスをしていたのは疑いないとされている⁽⁵⁶⁾。我々は、別稿で何篇かの書評を取り上げてそれらの意義を検討しよう。『年鑑』の中で最も注目すべきは、実は同時代人の著作に対する若きバークの忌憚なき書評であるように思われるからである。

文芸批評家、美学者、歴史家、ジャーナリストとしてのバークの名前は、精力的な文筆活動を通じて自ずと高まり、人々にその将来を嘱望せしめた。例えばロバート・ドズリーは、58年の或る書簡で、「非常に豊かな才能を有するアイルランド紳士たるバーク氏は、最初は法律を学んでいたが、幸せなことにそれを放棄したので、将来文壇で際立った人物になること間違いない⁽⁵⁷⁾」と述べている。文人から政治家への転進は、文壇で際立った人物になるだろうというドズリーの予想を裏切ることになった。しかしその文才や著述活動を通じて得られた幅広い知識は、政治家になった後も決して消え去ることなく、むしろ政治家あるいは政治思想家として大をなす礎となった。1758年、名優ギャリック宅

でのクリスマスの夕食会でパークに初めて会ったサミュエル・ジョンソンは、「エドモンド・パーク氏に初めて会った時、彼の素晴らしい才能に接して、彼と親しくなりたいという思いに熱烈に駆られた⁽⁵⁸⁾」と10数年後に回想を交えて語っている。当時からすでに文壇の大御所と謳われていたジョンソンも、パークの並外れた文才と博識ぶりには驚嘆せざるを得なかったのである。それ故にジョンソンも、ドズリーと同様の表現でもって、「パークは異常なほどの人物だ。彼の精神の流れはとどまるところを知らない。……パークを知っている我々は、やがて彼がこの国の一流の人士の一人になると確信している⁽⁵⁹⁾」とすることができたのであった。パークが、ジョンソンやレイノルズ (Joshua Reynolds) やゴールドスミスたちと共に、64年2月に有名な「文学クラブ」(the Literary Club) を設立し、その中心メンバーとして活躍していったことは言うまでもなかろう。⁽⁶⁰⁾ パークは、政治家や政治思想家である以前にまず文人であり、著名な文筆家であったのである。

文人としてその名を知られるようになったパークも、経済的には必ずしも楽ではなかった。固定収入は、『年鑑』の報酬としてドズリーから支払われる年額100ポンドだけであり、「パーク一家」を支える上に十分なものではなかった。しかも58年2月9日には長男リチャード、同年12月14日には次男クリストファーが生まれている。そのためパークは、より多くの収入を求めて就職活動を行っていった。パークが、空席になっていたマドリード領事の地位に就くために、W・マーカム (William Markham⁽⁶¹⁾) や、「ブルー・ストッキング」(Blue Stockings) の女王E・モンターギュ (Elizabeth Montagu⁽⁶²⁾) を通じて大ピットに働きかけたのはこの時期のことである。パークの生涯が明らかにしているように、この就職活動は失敗に終わった。しかし幸運なことにパークは、その後チャールモント卿 (1st Earl of Charlemont) を通じて政治家ウィリアム・ジェラード・ハミルトンと知り合い、彼の秘書になることができた。パークが政治の世界に足を踏み入れるようになったのは、ハミルトンの秘書となったこの時期を境としてである。

「1回限りの演説のハミルトン」(Single Speech Hamilton) という渾名を持つこの若き政治家⁽⁶³⁾ の下で、パークは有能な秘書として6年間にわたってその職務を遂行した。しかしパークは、秘書在職中も著作活動を止めることは決してなかった。「私は昨日ハミルトン氏と夕食を共にしました。そこにはギャリック氏もいましたし、若いパーク氏もいました。彼はボーリングブルック卿の文体で一書を著わし、非常に賞賛されています。彼は思慮ある人物ですが、まだ文人氣質を持っていますので、著述家ほど魅力的なものはないと考えています⁽⁶⁴⁾」と、ホレス・ウォルポール (Horace Walpole) は61年7月の或る書簡の中で語っている。ウォルポールが言うように、果たしてパークが「著述家ほど魅力的なものはない」と考えていたのかどうかは明瞭でない。しかしパークが、政治の実践に関心を示しながらも、今なお文芸やジャーナリズムの世界に執着し、それらに関する著述を継続したいと思っていたことは疑い得ない。そのことは、年300ポンドの年金下賜の見返りとして、より完全な協力と献身を要求するハミルトンに対し、文筆活動を続けるための余暇を求めるパークの次のハミルトン宛書簡からも明らかであろう。

「貴方が勉学仲間として私を採用して下さった時以来、私が自分の小さい著書を一種の年貢のように気にしていることを貴方は御存知のはずです。……私はこの仕事を延期することは望んで

いても、それを放棄する気は全くありません。その理由は、この著作の内容のためであり、私の生活設計のためです。私がこれまで獲得した利益のすべては、……ごく僅かな文学的名声のおかげです。……私は、この名声が新たな著作によって一層高まると同時に、少なくともそれと同じくらい危険にさらされるであろうことを良く知っています。しかし私のような二流の文士にとって、物を書くのを止めるのは世間から全く忘れ去られることを意味しますから、私はそうした危険を敢えて冒さなければなりません。しかしそのためには都合の良い時に、とりわけ議会開会中に適当な本を読み、且つ研究する適度の時間的余裕が必要です。御存知のように、この種の時間がどの程度必要かは定義を下すのに困難ですし、またその必要もありません。それは、私たちの良き相互理解から容易に解決されましょう。……私は、貴方の仕事がいかなる場合にも最優先されるべきだし、またあらゆる点で主要な関心事でなければならないと考えております。私の申し上げたいことは、私がそれ以外の適切な時に、他の事柄を考察することから完全に排除されているとはお考えいただきたいくないということ、ただそれだけなのです。⁽⁶⁵⁾」

パークとハミルトンとの間の「良き相互理解」は、結局のところ成り立たなかった。両者の関係は完全に冷えきって、65年2月になると、パークはハミルトンとの絶交を宣言している。⁽⁶⁶⁾そして友人宛書簡の中で、秘書を務めた6年間を、憤怒と無念の感情を頭にしながらこう回想した。

「私の生涯の最良の6年間、彼は文学的名声の追求と財産の増大の機会を私から奪い去りました。この6年間に彼は、非常に大きな財産を作ったばかりか、私の作った小さな財産さえも自分のものにしてしまいました。この間私が、同時代の大半の人々に追い抜かれたことに気付いてどのような心境に陥ったかを容易に理解していただけるでしょう。⁽⁶⁷⁾」

この兩人の間の不和と決裂はあまりにも有名であり、パークの生涯において、ハミルトンとの関係が修復されることは決してなかった。しかしながら我々は、秘書を務めたこの6年間が、パークにとって全く無駄な一時期であったと解してはならないであろう。むしろこの期間は、パークの主観的判断とは逆に、大きな「財産」を獲得して、それを無意識のうちに蓄積していた非常に重要な時期であったのである。けだしパークはこの6年間に、さまざまな政治的修業を積んで、「行動の場の哲学者」として世に出ていくための、まさにその最終的な準備を整えていたからである。パークが、演説草稿の作成を始めとして、諸々の政治上の必須事項を実地で学んだのはこの時期においてであった。また議会の傍聴席に足繁く通って、政治的知識の吸収に努めたのもこの時期のことであった。⁽⁶⁸⁾そして一層重要なことには、アイルランド議会对策のためにハミルトンに随行してダブリンに渡ったパークが、祖国の惨状をつぶさに観察し、アイルランド救済の論理を原理的なレベルから打ち出したのもまさにこの時期においてであった。このダブリン滞在期に書かれたのが、我々にとって極めて重要な著作『アイルランド・カトリック刑罰法論』(*Fragments of a Tract relative to the Laws against Popery in Ireland, [1761–65]*)である。本書は、アイルランド問題に素材をとりながら、それに先行する諸著作の基本理念を継受し、しかもその基本理念を政策の次元で具体的に展開した、その意味からして文字通りに政治的と言われるべき作品であったのである。パークは本書を著わすことによって、その政治思想の形成を、基本的な部分においてほぼ完了し得たのである。

我々は、稿を改めて、『ノート・ブック』から『刑罰法論』に至るまでの初期の諸著作を取り上げ、思想形成に及ぼしたそれらの意義を考察しよう。そして思想形成過程における、それらの諸著作の有機的関連性を検討しよう。それらは異なったジャンルの作品でありながら、それぞれが密接な内的関連性を有し、各々が政治的なものを内包しているのである。

注

- (1) なお、本稿をより良く理解するために、次の拙稿を参照していただきたい。「初期バークの政治思想（一）、（二）」（『早稲田政治公法研究』第11、12号、1982、1983年）、「エドモンド・バーク政治思想の形成 — カレッジ在学期及び『空白期』に限定して —」（小笠原弘親・市川慎一編『啓蒙政治思想の展開 — 近代政治思想の研究（Ⅱ）—』成文堂、1984年、所収）、「E・バーク『崇高と美』の課題 — 政治思想との関連において —」（日本イギリス哲学会編『イギリス哲学研究』第6号、御茶の水書房、1983年）、「E・バーク『イギリス史略』の一考察 — その憲法観をめぐって —」（同誌、第6号、1985年）、「E・バーク『イギリス史略』の課題と方法」（『早稲田政治公法研究』第13号、1984年）、「初期バークの歴史観」（同誌、第15号、1985年）、「E・バークとトリニティ・カレッジ」（同誌、第16号、1985年）、「初期バークの法思想 — 『刑罰法論』を中心として —」（同誌、第18号、1986年）。
- (2) カレッジ卒業から1750年までの経歴を詳しく論じたものとしては、T. McLoughlin, "Edmund Burke : The Postgraduate Years, 1748-1750," *Studies in Burke and His Time*, vol. X, no. 1 (Fall, 1968) がある。
- (3) バークがダブリンを去る直前に、ダブリン市でいわゆる「ルカス論争」(the Lucas Controversy) が起こり、バークは、「アイルランドのウィルクス」(the Wilkes of Ireland) たるチャールズ・ルカス (Charles Lucas) の急進的な愛国主義運動に加担して、ルカスを弁護する匿名のパンフレットを刊行したと従来からしばしば言われてきた。(Cf. Arthur P. I. Samuels, *The Early Life, Correspondence and Writings of the Rt. Hon. Edmund Burke* [Cambridge : Cambridge University Press, 1923] pp. 180-202.) しかしG・L・ヴィンセントリオが言うように (cf. Gaetano L. Vincitorio, "Edmund Burke and Charles Lucas," *PMLA*, vol. LXVIII, no. 5 [December 1953], 1047-55), この説は首肯し得るものではなく、したがってサミュエルズの書に再録されているパンフレット (Samuels, *op. cit.*, pp. 331-95) も、我々の考察対象から完全に外される。
- (4) バークとウィリアムの関係は、バークの生涯における一つの謎であるが、両者の関係を詳しく論じたものとしては、Dixon Wecter, *Edmund Burke and His Kinsmen : A Study of the Statesman's Financial Integrity and Private Relationships* (Boulder : The University of Colorado Studies, 1939) がある。なお、ウィリアムの生涯をコンパクトにまとめたものとしては、Lewis Namier and John Brooke, *The House of Commons, 1754-1790*, 3 vols (London : Her Majesty's Stationary Office, 1964), vol. II, pp. 153-58がある。
- (5) William Burke to the Duke of Portland (23 September 1780), *The Correspondence of Edmund Burke*, General ed. by T. W. Copeland, 10 vols (Cambridge : At the University Press ; Chicago : University of Chicago Press, 1958-78), vol. IV, p. 290.
- (6) Burke to Dr. William Markham [post 9 November 1771], *ibid.*, vol. II, p. 274.
- (7) Cf. The Minute Book, in Samuels, *op. cit.*, p. 289.
- (8) Burke, *An Essay towards an Abridgment of the English History*, 1757, *The Works of Edmund Burke*, 12vols (Boston : Little, Brown, and Co., 1871), vol. VII, p. 477.
- (9) Burke, *Speech on American Taxation*, 1774, *Works*, vol. II, pp. 37-38. (中野好之訳『アメリカへの課税に関する演説』＜エドモンド・バーク著作集(2)＞[みすず書房、1973年]、37頁。)
- (10) Burke to Richard Shackleton (31 August 1751), *Correspondence*, vol. I, p. 111.
- (11) *Correspondence*, vol. I, p. 121, editor's note ; James Prior, *Memoir of the Life and Chracter*

of the Right Honourable Edmund Burke, 2nd ed. 2 vols (New York : Burt Franklin, 1968, reprint of 1854), vol. I, p. 81.

- (12) Cf. Dixon Wecter, "The Missing Years in Edmund Burke's Biography," *PMLA*, vol. L III (December 1938), 1123 ; Isaac Kramnick, *The Rage of Edmund Burke* (New York : Basic Books, Inc., 1977), p. 55.

- (13) バーク父子の間には抜き差しならぬ不穏なものがあつたが、バーク自身、必ずしも父親を嫌悪し続けたわけではなく、また父親の意志に反抗し続けたわけでもなかった。そのことは、例えばアメリカで生活したいという意向が反対されるや、直ちに書き送った次の父親宛書簡からも読み取ることができよう。伝記作家がしばしば引用するこの手紙には、父を嫌悪し疎んじるというよりは、むしろ父親の愛情を希求しているバークの率直な気持ちが実に感動深く書きとめられているのである。「拝啓、私はネーグル氏の手紙を受け取りました。そこには、私の手紙が貴方にわたされたこと、私の提案が貴方と家族の者に伝わったことが書かれてありました。私自身驚いていますし、また私の提案が貴方の悲痛と憤怒の原因になったのではないかと大いに気をもんでいます。もしそうならば、それは私が最も避けたいと思っていた事柄です。私が自分の計画を貴方にお知らせしたのは、断固とした決意を報告するためではなく、望ましいと思われる仕事について貴方の意見を聞きたかったからです。この仕事はそれ自体悪いものではなく、応分の成功の見込みもあると思われます。私は自分の利益になるとと思われるものはすべて貴方に報告して貴方の忠告を受けるべきだと思っていますので、今回もそのように致しました。これは義務と感謝の念からなされるべきことだと思います。私は貴方を安心させること以外何も考えていませんので、たとえ合理的な計画や意図であろうとも、貴方を安心させるためならば私は喜んでそれを犠牲に致しますし、貴方の判断に従います。私の行為に不愉快な思いをせずとも、貴方は病気で充分苦しんでおられるのですから。だから私は貴方の意向に嫌々ながらではなく喜んで従います。……そして貴方が適当と思われる時にアイルランドへ帰るつもりでいます。……貴方の苦痛が軽くなりますように、貴方と母に幸せな歳月が続きますように、私は貴方の配慮と優しさと寛大さに対してこう祈らずにはいられません。この問題について私も随分思い悩みましたし、心配も致しました。しかし私の考えていることと言えば、貴方と母に対して従順で愛情深い息子であることを態度で示すよう心にとめていいること、ただそれだけなのです。」(Burke to Richard Shackleton, his father [11 March 1755], *Correspondence*, vol. I, pp. 119-20.)

このようにして、バークは一方で父親を疎んじながらも同時に彼を慕い、でき得る限り従順で愛情深い息子であろうとした。実際バークは、1758年に誕生した子供に父親リチャードの名を付けることによって父への愛情を示した。また彼は、不和を解消するために第三者を通じて『崇高と美』を父に送っている。それに対して父親は、「賞賛のしるし」としてバークに100ポンドの金子を贈ったと言われているが、この説の真憑性は疑わしい。しかしバークが第三者に調停を頼んで事態の打開をはかったこと、その調停が効を奏して一応の和解が成立したこと、そして和解成立に心底喜んだことは、「私は貴方の親切で、しかも首尾良くいった御尽力に対してどれほど感謝しているかをうまく表現することができません。……貴方は父の感情が治まったことを請け合せて下さいましたが、それは私にとって非常な喜びです。……今度の問題につきましては、すべて貴方の御親切のおかげでありますことを私自身強く感じています」(Burke to Agmondesham Vesey [10 September 1760], *Correspondence*, vol. I, p. 136) という、1760年9月10日付の調停人宛書簡から明らかである。バークは自ら努力することによって、曲がりなりにも父との和解にこぎ着けたのであった。しかしこのように一応の和解を見ながらも、バークにとって父親はついぞ愛を抱き得ぬ存在であった。父は最後まで権威的なものであり、およそ愛の対象ではなかったのである。そして息子エドモンドに複雑でアンビヴァレントな思いで眺められたリチャードは、1761年1月23日にこの世を去ったのであった。

- (14) John Morley, *Burke* (London : Macmillan & Co., 1879), p. 8.
 (15) Wecter, "The Missing Years in Edmund Burke's Biography," *op. cit.*, 1102.
 (16) *Correspondence*, vol. I, editor's Introduction, p. xvii.
 (17) Cf. Burke to William Burke (November 1750), *ibid.*, p. 105 ; Burke to Richard Shackleton (31 August 1751), *ibid.*, p. 111.
 (18) Cf. Burke to Richard Shackleton (28 September 1752), *ibid.*, pp. 112-14.

- (19) William O'Brien, *Edmund Burke as An Irishman* (Dublin : M. H. Gill & Sons, Ltd., 1926), pp. 43-45 ; Wecter, "The Missing Years in Edmund Burke's Biography," *op. cit.*, 1102 ; Robert H. Murray, *Edmund Burke : A Biography* (Oxford : Oxford University Press, 1931), p. 60.
- (20) Cf. Burke to Richard Burke, his father (11 March 1755), *Correspondence*, vol. I, pp. 119-20.
- (21) *A Note-Book of Edmund Burke*, ed. by H. V. F. Somerset (Cambridge : At the University Press, 1957), editor's Introduction.
- (22) Cf. William B. Todd, *Bibliography of Edmund Burke* (Suffolk : St Edmundsbury Press, 1982), p. 26.
- (23) 店主ロバート・ドズリーとは、アーサー・マーフィー (Arthur Murphy) を通じて1752年頃に知り合っている。なお出版に先立って、パークは稿料として6ポンド6シリング受領しているが、もし再版が出た場合、更に6ギニーを受け取る由ドズリーと話し合われている。Cf. *Correspondence*, vol. I, p. 190, editor's note.
- (24) Cf. Prior, *op. cit.*, vol. I, p. 86 ; Morley, *op. cit.*, p. 14 ; Murray, *op. cit.*, p. 68.
- (25) パークがニュージェント博士にどれほど世話になっていたかは、ニュージェントに捧げた1752年秋の次の詩の一節からも知ることができる。

.....

'Tis now two Autumns, since he chanc'd to find,
A youth of Body broke, infirm of mind,
He gave him all that man can ask or give,
Restor'd his Life, and taught him how to Live,
But what, and when and How this youth shall pay,
Must be discuss'd upon a Longer day.

.....

(Burke to Dr. Christopher Nugent [September 1752], *Correspondence*, vol. I, p. 117.)

- (26) Morley, *op. cit.*, pp. 11-12.
- (27) *A Note-Book of Edmund Burke*, pp. 53-54. なおこうしたパークの女性観が、彼のブルジョア的貴族主義を表現したものであることについては、水田珠枝「近代思想における女性の従属 —— ルソーとパークを中心に ——」(歴史学研究会編『歴史学研究』第255号, 青木書店, 1961年7月) 参照。
- (28) Cf. *A Note-Book of Edmund Burke*, pp. 55-57.
- (29) Cf. Thomas Macknight, *History of the Life and Times of Edmund Burke*, 3 vols (London : Chapman and Hall, 1858), vol. I, p. 103 ; Thomas W. Copeland, *Our Eminent Friend Edmund Burke : Six Essays* (Westport : Greenwood Press, 1970, reprint of 1949), p. 47 ; Kramnick, *op. cit.*, p. 81.
- (30) Reproduced in Samuels, *op. cit.*, p. 404.
- (31) このジョンは、後にパークの従妹ルシンダ・ネーグル (Lucinda Nagle) と結婚している。
- (32) Cf. Copeland, *op. cit.*, p. 50.
- (33) Cf. Donald Cross Bryant, *Edmund Burke and His Literary Friends* (St. Louis : Washington University Studies, 1939), p. 197.
- (34) Burke, *Reflections on the Revolution in France*, 1790, *Works*, vol. III, pp. 292, 494. (半沢孝磨訳『フランス革命の省察』<エドマンド・パーク著作集(3)> [みすず書房, 1978年], 60, 249頁。)
- (35) Burke, *Letter to a Member of the National Assembly*, 1791, *Works*, vol. IV, p. 28 ; *Letters on a Regicide Peace*, 1796-97, *Works*, vol. V, p. 312.
- (36) Cf. Todd, *op. cit.*, p. 34.
- (37) *Literary Magazine*, 1757, vol. II, pp. 182-89 ; *Monthly Review*, vol. XVI, pp. 473-80. Cf. Herbert A. Wichelns, "Burke's Essay on the Sublime and its Reviewer," *The Journal of English and*

Germanic Philology, vol. XXI (1922), 647-48.

- (38) Hume to Adam Smith (12 April 1759), *The Letters of David Hume*, ed. by Y. T. Greig, 2 vols (Oxford: Clarendon Press, 1932), vol. I, p. 303.
- (39) James Boswell, *The Life of Samuel Johnson*, Everyman's Library, 2 vols (London: Dent & Sons Ltd., 1973), vol. I, p. 367.
- (40) Cf. James. T. Boulton, Introduction to Burke's *A Philosophical Enquiry into the Origin of our Ideas of Sublime and Beautiful* (London: Routledge & K. Paul, 1958), pp. cxxi-cxxii.
- (41) Cf. *ibid.*, p. cxxi. なお、ドイツ語訳はC・ガルフェ (Christian Garve) によってなされ、1773年に刊行されている。
- (42) Cf. William Guild Howard, "Burke among the Forerunners of Lessing," *PMLA*, vol. XXII (1907), 608-32; Boulton, *op. cit.*, pp. cxxii-cxxv.
- (43) Cf. *ibid.*, pp. cxxv-cxxvi.
- (44) Burke, *An Account of the European Settlements in America*, 2 vols (London: R. and J. Dodsley, 1757), vol. I, Preface.
- (45) Cf. Todd, *op. cit.*, p. 29.
- (46) Quoted in Wecter, "The Missing Years in Edmund Burke's Biography," *op. cit.*, 1120.
- (47) Todd, *op. cit.*, p. 29.
- (48) *Ibid.*, p. 42; *Correspondence*, vol. I, p. 164, editor's note.
- (49) Prior, *op. cit.*, vol. I, p. 104; Copeland, *op. cit.*, p. 128, note.
- (50) *Correspondence*, vol. I p. 164, editor's note.
- (51) Burke to William Gerard Hamilton (March 1763), *ibid.*, p. 164.
- (52) 中野好之『評伝バーク』(みすず書房, 1977年), 91-92頁参照。
- (53) Cf. Carl B. Cone, *Burke and the Nature of Politics: The Age of the American Revolution* (Lexington: University of Kentucky Press, 1957), p. 31.
- (54) バークとドズリーとの契約書は, Copeland, *op. cit.*, p. 96に再録されている。
- (55) *Ibid.*, p. 93.
- (56) バークと『年鑑』との関係を詳しく論じたものとしては次のものがある。Copeland, "A Carrer in Journalism," "A Body of Anonymous Writing," in *ibid.*, pp. 92-117, 118-145; "Edmund Burke and the Book Reviews in Dodsley's *Annual Register*," *PMLA*, vol. LVII, no. 2 (June 1942), 446-68; Bertram D. Sarason, "Edmund Burke and the Two *Annual Registers*," *PMLA*, vol. LXVIII, no. 3 (1953), 496-508; Bryant, "Dodsley: The *Annual Register*," in *op. cit.*, pp. 289-97; Philip Magnus, "Burke's Connection with the *Annual Register*," in *Edmund Burke: A Life* (London: John Murray, 1939), pp. 333-35.
- (57) Cf. Bryant, *op. cit.*, p. 290.
- (58) Boswell, *op. cit.*, vol. I, p. 471.
- (59) *Ibid.*, p. 619.
- (60) バークとジョンソン、及び他の文人たちとの関係については, Bryant, *op. cit.*が詳しい。
- (61) このウィリアム・マーカムは, ウェストミンスター・スクールの校長で, 後にヨーク大主教となった人物である。彼は, バークの就職を実現すべく, クウィンズベリ公爵夫人 (Duchess of Queensberry) に次のような推薦状を書いている。「私の友人が誰であることを申し上げます。彼の名前はエドモンド・バークと言い, 文人としての彼の名前は, 貴女にとって全く未知でないと思います。彼は, 『自然社会の擁護』というボーリングブルック卿の世界を模した作品と, 『崇高と美』という先年出版された非常に優れた作品を著わしています。更に申しますならば, 彼の主たる勉学は, 国家公事と我が国の通商問題に向けられてきました。彼は非常に博識で, 際立った事務能力を持っております。したがいまして, 然るべき地位さえ与えられるならば, 祖国に対して偉大な貢献をなすと思います。」(Quoted in Murray, *op. cit.*, p. 87.)

- (62) E・モンターギュとバークとの関係については, cf. "Mrs. Montagu : Bluestockings and Literary Hostesses, in Bryant, *op. cit.*, pp. 256-74.
- (63) ハミルトンについては, cf. Joel J. Gold, "In Defense of Single-Speech Hamilton," *Studies in Burke and His Time*, vol. X, no. 2 (Winter, 1968-69), 1138-53.
- (64) Horace Walpole to George Montagu (22 July 1761), *Letters of Horace Walpole*, ed. by Charles Duke Yonge, 2 vols (New York : G. P. Putnam's Son's, 1890), vol. I, p. 213.
- (65) Burke to William Gerard Hamilton [March 1763], *Correspondence*, vol. I, pp. 163-64.
- (66) Cf. Burke to William Gerard Hamilton [ante 12 February 1765], *ibid.*, pp. 179-81.
- (67) Burke to John Hely Hutchinson [May 1765], *ibid.*, p. 200.
- (68) Cf. Burke to Charles O'Hara (23 November [1762]), *ibid.*, pp. 155-56 ; (25 November 1762), *ibid.*, pp. 156-58 ; (9 December [1762]), *ibid.*, pp. 158-160 ; (12 December 1762), *ibid.*, 160-61 ; (30 December 1762), *ibid.*, pp. 161-63.